

令和3年度 教育課程特例校実施状況(自己評価・学校関係者評価)

聖隷クリストファー小学校は、日々変化を遂げる国際社会の中で活躍するために必要な高い英語力と能力、知識を備えた人材を育成するため、国語及び社会の教科以外の授業を外国人教員による英語で行う英語イマージョン教育を行うことと、図画工作、外国語活動の時間、総合的な学習の時間の一部を英語科の時間に充てる教育課程特例校としての認定を受けています。教育課程特例校は、特別の教育課程の実施状況に対する自己評価と学校関係者による評価を毎年公表することになっています。

	評価項目	具体的取り組み	自己評価		学校関係者評価	
			評価	反省と改善策	評価	意見
英語イマージョンで行う特色ある学び	英語イマージョン環境の充実	① 日本人教員と外国人教員の二人による学級指導体制とする。 ② 朝の礼拝時に英語の讃美歌に触れる。 ③ 掲示物等に効果的に英語を用いる。 ④ 英語図書を揃える。 ⑤ 外国人教員は原則的に常に英語を用いる。 ⑥ 教員と児童・保護者間の連絡ツールで英語を用いる。 ⑦ ICT を効果的に用いる。	B	① 日本人教員と外国人教員が、協力して朝の会・帰りの会を行うなど、英語イマージョン環境が確保されてきた。両教員間での意思疎通が徐々に図れるようになってきた。今後はペアを組んでいる教員同士のミーティングの時間をさらに確保していきたい。 ② 賛美歌を英語で歌い、英語に触れる機会を多くもてた。毎朝の礼拝時には、司会児童が英語で全校にアナウンスする時間も取り入れ、充実してきた。 ③ それぞれの担任が、英語で児童に作成させた構内掲示物を掲示できるようになってきた。英語での表記が徐々に増え、言語習得を意識した掲示物となりつつある。 ④ 英語の蔵書は段階的に揃える予定であり、令和3年度には、蔵書を増やした。今後、計画的に探究学習の資料になるような書籍を増やしていく。 ⑤ 外国人教員は概ねオールイングリッシュで授業ができた。 ⑥ 外国人教員が英語で学習報告をするなど、有効に活用できていた。今後も継続したい。 ⑦ iPad を用いて英語で表されている学習アプリケーションをどの学年も使用した。	B	児童が英語で記入した掲示物や自然に英語を児童が外国人教員と会話する姿など、英語力が向上した姿も見られるようになった。今後も、この取り組みを続けていきたい。

※評価点は、A(十分に効果があった)・B(成果があった)・C(少し成果があった)・D(成果がなかった)

	評価項目	具体的取り組み	自己評価		学校関係者評価	
			評価	反省と改善策	評価	意見
英語イマージョンで行う特色ある学び	英語による探究的な学び	<ul style="list-style-type: none"> ① 教科の枠を超えた学びを英語で行う。 ② 教科学習の中で、英語で探究的学びを展開する。 ③ 児童の学びに対し形成的評価を行い、個々の英語力に合わせた指導を展開する。 ④ 英語イマージョン部の研修会実施により、教員の指導力向上を図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ① SIP (Seirei Inquiry Program)という、教科等横断型探究授業を実施した。令和3年度は、6つの単元を年間計画に位置付け、それぞれの学年で工夫して取り組んだ。今後、学校全体としてめざす児童像をもとにした、教育を充実させていきたい。 ② 英語を用いる教科の中では児童が体験的に英語を身に付けることができていた。 ③ 一斉授業に偏らない授業展開を試みたが、新型コロナウイルス感染症対策などで、十分には実施できなかった。授業の中で個々の能力に合ったタスクに取り組ませることができるよう、弾力的に指導の工夫を行っていく必要がある。 ④ 英語イマージョン部の月2回によるミーティングにより、外国人教員中心にどのような指導法が効果的か話し合うことにより、教員の指導力向上につながってきた。 	B	教科内、教科等横断型授業双方について、どのように英語の学習環境を組み入れていくか精査する時期になってきている。英語による探究的な学びで身に付けた英語が、学校生活や体験の中で使われていくことがのぞまれる。

※評価点は、A(十分に効果があった)・B(効果があった)・C(少し効果があった)・D(効果がなかった)